



壁の装飾は利用者の手づくり



職員も勝負を大いに盛り上げる



歌謡曲などそれぞれの十八番を歌い上げた



どのチームが新聞紙にボールを多く乗せられるか競い合う

一人ひとりが 何がしたいか 吸い上げて ケアに活かす

神奈川県北部に位置し、県内で3番目に人口が多いまち・相模原市。市内を走るJR相模線の相武台下駅から歩いて数分の場所にあるのが、「新戸デイスサービスセンター」だ。

2階に上がると、カラオケ機器をつないだテレビ画面に映しだされる歌詞に合わせて、利用者が自慢の喉を披露していた。また、奥では複数人がテーブルを囲んでトランプゲームをしていたりと、思い思いに過ごす利用者の姿があった。

介護保険制度が始まった2000年にオープンした同施設は、利用者の尊厳やプライバシーの尊重を方針に掲げている。そして「ここに通いたい」と思ってもらえるよう、さまざまな工夫を施している。たとえば、利用を始める際には趣味やデイで

したいことなどを聞き取り、人となりを把握して活動の内容に反映させたりしている。他にも「同性介助の徹底」や「活動内容、食事の選択」を開設当初から取り入れている。ほかにも施設には機械浴と一般浴があるが、なるべく一般浴に入れることをめざしているという。

いずれの行いも根底にあるのは「当たり前のことを当たり前にする」という考えだ。女性職員が男性利用者の入浴介助を行うことは、介護現場では何

珍しいことではない。しかし、一般社会ではあり得ないことだ。この「施設内」と「施設外」の「当たり前」が乖離することのないよう、気を配っている。

「介護施設はどこか『異空間』のような、社会から離れた場所のように感じられがちです。しかし、デイサービスは『在宅生活の一助』だと考えています。ご利用者の要望にすべて応えることはなかなか難しいですが、それでも一人ひとりのパーソナリティや状況を把握して、ケアにあたっています。同性介助も、人員の配置とかを鑑みると厳しい面はありますが、それでもご利用者の尊厳を守るためには必要です」と、管理者の久保田純さんは話す。

一方で、活動内容をいくつも用意すると、職員の負担が増えてしまうのではないかと考えてしまいがちだ。だが、同施設では職員一人ひとりの役割を明確化し、得意なことを担当してもらっている。また、利用者の情報を共有することも欠かさない。会議の場や申し送りで話したり日誌に書いたりすることはもちろん、どんなに些細なことであっても情報を上げるようにしている。

「たとえば送迎時の『この間ここに行った』というようなたわいもない会話はもちろんご利用者によっては『あの人にこんなことを言われた』『入浴の順番を早くしてほしい』といったようなことをお喋りのなかで伝えてくれることがあります。なので、小さなことでも情報を吸い上げて共有しています」と久保田さん。職員間のコミュニケーションを密にすることで、利用者のニーズに応えるだけでなく、働きやすさにもつながっているようだ。

続きは、本誌5・6月号をご覧ください